比較すれば次の如くである。

	一九三九年	一九三三年	總數の增減率
新教教會所屬者及其他の基督教徒	五四・二%	五四・五%	(+) 三・四%
羅馬カトリック教會所屬者	四〇・三%	四〇・七%	(+) 二・八%
ユダヤ教會所屬者	〇・四%	〇・九%	(−) 五七・四%
非基督教的宗教團體所屬者	〇・一%	〇・二%	(−) 四六・一%
神を信ずる者	三・五% 一・五%	三・六%	(+) 四一・九%
信仰なき者	〇・〇%	〇・一%	(−) 五六・六%
	100・0%	100・0%	(+) 三・八%

(備考) 一九三三年度はザール地方を除く。舊領域内は六月一六日、ザール地方は三五年六月二五日、オストマルクは三四年三月二二日、ズデーテン獨逸地方は三四年一二月一日の調査結果に依る。

(以上 一九四一年第九號)

ボヘミア及モラビア兩獨逸保護領の一九四〇年人口動態

ボヘミア及びモラビア兩獨逸保護領の昨一九四〇年度人口動態は獨逸統計局により發表されたが、その數字は以下の如く、出産力がいよ〳〵本格的な上向を辿り初めたことを物語つてゐる。

	總數		
	出生	死亡(死産を除く)	自然增加
一九三〇年	一三三、三〇七	九〇、四七二	四一、八三五
一九三一年	一三五、三二五	九二、三九六	四三、九二九
一九三二年	一三三、五五五	九一、六六四	四〇、八九一
一九三三年	一三四、二六六	九〇、一三二	四四、〇八四
一九三四年	一一〇、四三一	八七、一七四	二三、二五七
一九三五年	一〇四、六〇二	八九、八七五	一四、七二七
一九三六年	一〇一、八一七	八九、一七四	一二、六四三
一九三七年	一〇〇、一四四	八八、八〇二	一二、三四二
一九三八年	一〇五、四八七	九一、八五〇	一三、六三七
一九三九年	一〇九、五三七	九六、四四四	一三、〇九三
一九四〇年	一二五、〇五二	一〇〇、〇〇七	二五、〇四五

人口千に付

	婚姻	出生	死亡(死産を除く)	自然增加
一九三〇年	九・五	一九・三	一三・二	六・一
一九三一年	九・一	一八・二	一三・四	四・八
一九三二年	九・〇	一七・八	一三・三	四・五
一九三三年	八・六	一六・五	一三・〇	三・五
一九三四年	八・三	一五・九	一二・五	三・四
一九三五年	八・〇	一五・〇	一二・九	二・八
一九三六年	八・二	一四・六	一二・八	一・八
一九三七年	八・六	一四・四	一二・七	一・七
一九三八年	七・九	一四・三	一二・五	一・八
一九三九年	一〇・八	一四・七	一三・〇	一・八
一九四〇年	一〇・三	一六・八	一三・四	三・四

尙、乳兒死亡率は(出生百に付)一九三九年には九・五、昨四〇年は九・二となつてゐる。

(Wirtschaft u. Statistik 1941 Nr. 8)

外國に於ける癩の流行史

(埋め草)

外國に於ける癩流行の歴史は實に古いものであつて、恐らく有史以來のことであらうと謂はれてゐる。地域的にはエジプト、印度、支那をその三大根源地と見做してゐる。就中印度、支那の癩は今尙猖獗を極めており、又フイリツピン、布哇、ジヤバ等南太平洋の諸島に多數存在し、更に又南米ブラジル方面にも相當に存在する。エジプトの癩は一部アフリカに流行し、今も相當に濃厚な分布をみておるが他は西暦紀元前六〇〇年頃ペルシヤに流行し、次でギリシヤローマに這入つて來たと稱されており、其頃は未だ地中海沿岸のみであつたが、十字軍の遠征等によつて中部歐洲へも蔓延したものと考へられており、五世紀頃に歐洲でも相當な流行があり、十五世紀十六世紀頃までもかなり多數の患者發生を見たものである。是等流行の狀態を窺ふ事の出來る資料は當時の繪畫であつて、ウキーンの美術館に陳列されたペーテル・ブルユーゲルの繪やハンス・ボールバインの繪がそれである。前者は市井雜踏の圖でこの中に確に癩と思はれる患者が徘徊してゐるし、後者はエリザベス女の圖で聖女が癩患者を勞つてゐる樣子を現はしたものである。

斯の如く盛な流行を示した惡病も、西歐に於ては十七世紀頃から漸次減少し、十九世紀には益〻減少して今は殆んど無癩の域に達してゐるのである。英・米・獨・佛等には癩患者は殆んどなく、若干あるも異民族で他國から輸入されたものであり、諸威の如きも十九世紀頃には二、六〇〇人の癩があつたものが、二十世紀の初めには、二四三人になり、一九二五年には僅かに一〇餘名となり、已に無癩の域に達して了つたのである。かく歐米諸國では既に豫防事業に成功して居るといふことは、我國民として大いに銘記せねばならぬ事である。

(財團法人癩豫防協會編「我國の癩豫防事業に就て」より)